

## ことばと文化Ⅱ（脳とことば）

### （１）科目の紹介

基本情報	平成 25 年度・教養教育・前期	曜日・校時	集中講義
モジュール名	ことばと文化	科目名	脳とことば
教員名（所属）	橋本優花里（非常勤講師）		教室 G38、A41
選択者数	50 名	2 年生の所属学部	医学部 歯学部 工学部 環境科学部
再履修数	0 名		( 31 名) ( 6 名) ( 6 名) ( 7 名)
<p>授業のねらい：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ことばを制御する脳の構造を学ぶ</li> <li>・ 種々の脳の機能不全がことばの産出や理解に及ぼす影響の違いについて知る</li> <li>・ ことばの問題を克服するための手段について学ぶ</li> </ul>			
<p>アクティブ・ラーニングに向けて工夫した点：</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集中講義であったため、1 回あたり 2 日間 8 時間分の授業を学生が飽きることなく行えることができるよう、講義とアクティブ・ラーニングのバランスを考えながら行った。</li> <li>・ 予習課題を基に授業を展開し、調べたテーマについてグループでまとめ、プレゼンを行った。なお、プレゼンは 1 日（4 時限分）に 1 回、計 3 回行った。</li> <li>・ 全員が一目で情報を共有でき、どこからでも自由に記入・表現できる、また、作成物を一度に掲示し相互に見ることができるといった利点から、プレゼンの媒体には模造紙を利用した。</li> <li>・ プレゼンテーション時には、グループごとに自己評価と他者評価を行い、他グループからの評価については、発表グループに即時にフィードバックをした。</li> <li>・ 各日の最初には、前日の授業に関するコミュニケーションカードの内容の紹介と小テストを実施した。</li> <li>・ 中間評価の結果を参考に、後半の授業形式にディベートを取り入れた。</li> <li>・ 小テストおよびディベート時のフロアの意見の収集にクリッカーを利用した。</li> <li>・ フロアからの自発的な質疑応答が少なかったため、グループを指定し、全員が感想または質問をする機会を設けた。</li> <li>・ コミュニケーションカードの記入を求め、次回の授業において質問への回答や感想の紹介を行うことで、学生の振り返りの一助とするとともに、学生の理解の程度の把握に利用した。</li> </ul>			

### （２）学修の評価

到達目標	<ol style="list-style-type: none"> <li>① 脳とことばの関係を理解できる。</li> <li>② 脳の機能不全によることばに関連した障害様相について理解できる。</li> <li>③ コミュニケーションを獲得するためのリハビリテーションや訓練について理解する。</li> <li>④ 障害と健常の垣根を越えて、授業で学んだことをよりよいコミュニケーションを目指した実生活に生かすことが出来る。</li> </ol>
成績評価の方法	授業時提出物(30%)，コミュニケーションカードの提出を含む，授業への積極的な参加・貢献度(10%)，および定期試験(60%)，から総合的に判断して成績評価を行った。

### (3) 授業の進行

概要：		
1回～4回：ことばに関わる諸器官やことばを制御する脳の構造を学び、脳の地図を作ることでコミュニケーションに必要な脳領域について考える。		
5回～8回：脳の発達とことばの発達を学び、乳幼児の言語発達年表を作ることで、子どもの発達段階に沿った言葉の発達について理解する。また、DVDの視聴から子どもの言葉の変化の実際を理解する。		
9回～12回：脳の損傷がもたらすコミュニケーションの障害について学び、脳の損傷がもたらす様々な障害の特性とそれに対するアプローチについてまとめることで、それらについて理解する。		
13回～15回：脳に関する諸説についてディベートを行い、批判的な思考に取り組む。		
回	学習内容	授業方法（講義,グループワーク,プレゼンなど）
1   4 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>授業で扱われる内容についての事前知識を見るクイズ</li> <li>アイスブレイクとしての、「コミュニケーションゲーム：言葉の一方通行，双方向」</li> <li>言語システム，言語理解について学ぶ</li> <li>言語（語彙）ネットワークの体験（自由連想課題）</li> <li>予習課題に基づいた脳の地図の作成（グループワーク）</li> <li>脳の地図のプレゼンテーションとフィードバック</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予習「脳の構造と働き（特に大脳皮質と呼ばれる部分や言語に関わる脳部位）」について調べてまとめる。</li> <li>講義</li> <li>グループワーク</li> <li>プレゼンテーション</li> </ul>
5   8 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>復習クイズ</li> <li>脳の進化と発達について</li> <li>良い聞き手となる方法—色々な聴き方ロールプレイ</li> <li>予習課題に基づいた言葉の発達年表作成（グループワーク）</li> <li>言葉の発達年表プレゼンテーションとフィードバック</li> <li>復習クイズ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予習「乳幼児の言語発達段階」について調べてまとめる。</li> <li>クイズ</li> <li>講義</li> <li>ロールプレイ</li> <li>グループワーク</li> <li>プレゼンテーション</li> </ul>
9   11   12 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>復習クイズ</li> <li>言葉の発達についての振り返り</li> <li>乳幼児の言葉の発達に関するDVD視聴</li> <li>脳の側性化について学ぶ</li> <li>分離脳とことば</li> <li>予習課題に基づいた脳の損傷がもたらすことばやコミュニケーションの障害に関するプレゼンテーション準備（グループワーク）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>予習「脳の損傷がもたらすことばの障害」について調べてくる</li> <li>視聴覚教材</li> <li>講義</li> <li>グループワーク</li> <li>プレゼンテーション</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・言葉やコミュニケーションの障害に関するプレゼンテーションとフィードバック</li> <li>・脳の損傷がもたらす障害に関するドキュメンタリーDVDの視聴</li> </ul>	
13   15 回	<ul style="list-style-type: none"> <li>・脳の損傷がもたらすことばやコミュニケーションの障害のふりかえり</li> <li>・予習課題に基づいて、グループで意見をまとめ、ディベートの準備をする。</li> <li>・ディベートを行い、フロアの意見の変化を見る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・予習：下記のテーマについて、肯定または否定の立場からの資料を集め、まとめる。</li> <li>①我々は脳を 10%程度しか使っていないのか</li> <li>②男女では言語能力に違いがあるのか</li> <li>③脳トレには効果があるのか</li> <li>④胎教には効果があるのか</li> <li>⑤言葉の獲得に環境は影響するのか</li> <li>・ディベート</li> </ul>

#### (4) 授業の成果

全体の総括	<ul style="list-style-type: none"> <li>・初めて集中的なアクティブ・ラーニングを試みたが、試行錯誤の連続で、学生のコミュニケーションカードや中間評価の結果を見ながら講義内容を変えていったため、必ずしもシラバス通りの計画とならなかった（特に13-15回目）。</li> <li>・学部横断的であることから、興味や関心、事前の知識の程度などにもばらつきがあったため、今回は学生のレディネスをあらかじめ把握できるような工夫をし、それに合わせた取り組みが必要であると考えた。</li> <li>・プレゼンテーションやディベートにおける表現力、批判的思考力等については、実現のための具体的なステップの提示や、詳細なフィードバックが必要だったと感じる。</li> <li>・1回目の授業終了時の学生の達成度が2回目に引き継がれていない印象を受ける場面が見受けられた。今後同様の形式で実施するのであれば、1回目と2回目のプランクをどうフォローアップしていくかを検討する必要があると考える。</li> <li>・成績については、提出物等と試験（持ち込み可）をメインに評価したが、この方法では、点差が開きにくく、点数の偏りが生じてしまったため、今後の課題として検討したい。</li> <li>・提出物については、「インターネットのコピー&amp;ペースト」は避けるように教示し、その理由についても配布資料等で事前に伝えたが、依然としてインターネットの文章の末尾のみを変えたものや、2つのサイトを半分ずつコピー&amp;ペーストをしたものなどがあった。事前学習は、あくまでも授業内で利用する情報収集という位置づけであったため、グループ内で話し合いながら、それらの情報の真偽について整理できればいいと考えれば、必ずしもインターネットの情報をそのまま持ち込むことが悪いとはいえず、成績評価の際に苦慮した。学生が情報について整理し、考え、加工しなければならぬ課題の出し方が今後の検討課題である。</li> </ul>
-------	--

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループワークの際に、自分たちが調べてきた情報以上の情報が必要となったとき、学生は自分たちの携帯端末を操作し、それらの情報を収集していた。グループワークの際に必要な情報を入手できる環境づくりも必要かもしれない。</li> </ul>
今後の改善点	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 集中講義形式ならではの各講義間のブランクのフォローアップ</li> <li>・ 授業欠席のフォローアップ</li> <li>・ 定期試験の内容</li> <li>・ 学生のレディネスのチェック</li> <li>・ 到達度の評価の方法</li> <li>・ 事前学習（予習課題）の設定方法</li> </ul>

#### (5) アクティブ・ラーニングの充実にに向けた提案

ポイント提案	<p>アクティブ・ラーニングに取り組み始めたばかりなので、提案らしい提案はできませんが、上記の改善点の中でも、到達度の評価方法と学生のスキルのフォローアップが私自身の喫緊の課題です。また、教員一人で数十名の学生をのせて授業を継続していくことは難しいことから、学生と触れ合いながら学習を促すことができる TA の充実が必要だと思われます。</p>
参考になる資料	<p>長崎大学のアクティブ・ラーニング事例集はとても参考になると思いました。また、私がこのたび授業を作る上で参考にしたのは、以下の書籍です。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 協同学習の技法 ナカニシヤ出版</li> <li>・ 先生のためのアイデアブック 日本共同教育学会</li> <li>・ 相互理解を深めるコミュニケーション実践学 ぎょうせい</li> </ul>

(別添資料)